

哀歎抄（十七）

尾崎 文英ぶん えい

寒風もひかりともなふ正月よ淑氣に満ちて日が昇りくる

凜と咲く花の一つに寒椿原節子なるひとのおもかげ

筆跡を辿りたどりて洛南に元政尋ぬ雪の降る日に

男みな他界したりと喪主が云ふをみなが多く冬日道行く

斧錆びてまつたく錆びて雪が降るこの家にむかし祖父母と父と

冬帽を愛しと被り席に来て書物をひらく老教師居り

白髪のが髪（髪）様相なりうつる寒水にかいつむりきて髪（舟）汝まし潜れり

浮寝鳥一つ目覚めて羽ばたけば按針河畔旅情身にしむ

花どきの二階に目覚め匂を作る階下に叔母が鯁たたたく音

清澄の蓮華咲きつぐ雨の中モリアヲガヘルいまを鼻（鼻）啼なきゐる

横湯川この岸縁をなほ歩く天与の森に河鹿啼くなり

かの熱き日とも重なり空焦がす百日紅よ戦よあるな

（『日本短歌協会会員』）

